

軍事化の道程

—小島信夫『墓碑銘』に見る軍隊小説と家庭小説の結節点—

村上 克尚

要旨

本稿の目的は、小島信夫の軍隊小説『墓碑銘』（一九五九・五～六〇・二）を対象とし、諸個人を軍事化（シンシア・エンロー）するメカニズムを記述すると共に、小島の軍隊小説と家庭小説との結節点を探ることにある。本稿では、「混血」の主人公、トーマス・アンダーソン＝浜仲富夫が日本軍兵士へ軍事化されていく過程を、三つの段階に分けて分析する。すなわち、軍隊への志願、軍隊内の階級意識の内面化、軍隊内の連帯感の獲得である。本稿は、このそれぞれの段階に、男性／女性の性差、及び人間／動物の種差が機能していることを指摘する。フィリピンのレイテ島で全てに裏切られた浜仲は、裸体となり、「おれは日本人ではない。おれはアメリカ人でもない」と叫ぶ。この叫びからは、『墓碑銘』連載時の日米安保条約改定を射程に捉えつつ、日本にせよ、アメリカにせよ、国家による軍事化の企図を根底から否定する意志を読み取れる。この点に、男性／女性、人間／動物といった境界線を問い直し、「わが家」の閉じた安らぎを、異質なものの歓待へと開こうとする小島の家庭小説の企図との共通点を指摘できる。

キーワード：小島信夫、『墓碑銘』、軍事化、家庭、動物

1. 問題設定

小島信夫は、『抱擁家族』（一九六四・七）が代表作として知られており、家庭小説のイメージが強い作家である。しかし、初期には多くの軍隊小説を残している。小島は、東京帝国大学を卒業した翌年の一九四二年に徴兵され、中国に派遣された。暗号兵としての訓練を受け、四四年には北京に設置された情報部隊に転属になる。このことが幸いし、原隊はレイテ島で壊滅したものの、小島は北京で敗戦を迎えた。小島の主要な軍隊小説には、「燕京大学部隊」（五二・四、一一）、「小銃」（五二・一二）、「星」（五四・四）、「城壁」（五八・九）などがある。リアリズムから抽象的な手法までを用いて、戦争を多面的に捉えようとしている点が特徴と言えるだろう。

『墓碑銘』は、これらの軍隊小説の締めくくりとも言える作品であり、五九年五月から六〇年二月まで『世界』に連載された。アメリカ人の父と日本人の母を持つ「混血」の

主人公が、軍隊の中で「真正な日本人」になろうと努力していくという設定は、「星」のそれを踏襲している¹。ただし、長編小説である『墓碑銘』では、「星」よりも遥かに多くの人物たちが登場することで、多様な位置に生きる個人を多様なかたちで動員していく軍事化²のメカニズムがより詳細に描出されることになる。

本稿は、トーマス・アンダーソン＝浜仲富夫という主人公が日本軍兵士になっていく過程に焦点を当てつつ、『墓碑銘』における軍事化のメカニズムの全体像を描き出すことを目的とする。まずは、「混血」として差別される浜仲が、なぜ日本軍兵士になりたいという欲望を喚起されるのかを検討する。次に、軍隊に入った浜仲が、どのように兵士として教育されていくのかを、動物と女性の利用のされ方に注目しながら考察する。最後に、『墓碑銘』が、六〇年の日米安全保障条約改定をめぐる渦中で書かれたことに注目し、「おれは日本人ではない、おれはアメリカ人でもない」という浜仲の最後の言葉に、同時代の日米の軍事化の企図を根底から撃つ力を読み取っていきたい。

2. 日本人になること

『墓碑銘』はこれまで論じられる機会の少なかった作品である。江藤淳は連載途中で、「野心作という点では〔安岡章太郎の〕『海辺の光景』に劣らない」としながらも、「〔主人公が日本人とアメリカ人の中間的存在であるといった〕寓話的設定そのものにふくまれている観念性と、この作家独特の感覚的なものとの背馳を、今後どのように解決するのであろうか」³と疑問を投げかけた。この「背馳」の解決は、批評家の悩みどころでもあった。例えば、濱本武雄は、『墓碑銘』の新しさを、「私小説的」なりリアリティにひとまず頼らなければ、読者の反応を誘い出せない」日本文学の慣習を超え、「仮構性のバネを備えた作品」⁴である点に見ようとした。反対に、千石英世は、『墓碑銘』を「日本の戦後戦争小説一般とは明確に一線を画する小説」とした上で、「戦争を極私の次元で、あるいは極私の日常性の次元で捉えようとする」⁵点に独創性を認める。柿谷浩一も、「青い眼を持つ日本兵・富夫の苦悩や悲劇を描きながら、戦争と軍隊のかもしれない「おかしさ」や、兵士たちの「人間的な部分」も描き出して」⁶いることを特徴として挙げている。

このような読みの対立は、公的領域と私的領域の関係を批評家がどのように捉えるかという問題と繋がっている。公的領域を重視しすぎれば、それ自体政治的に構築されている私的領域の問題を、単に「私小説」的として排除してしまうことになる。また、私的領域を重視しすぎれば、小説が政治的な問題を扱うこと自体を、「観念」的、「戦後小説」的として排除してしまうことになるだろう。小島自身は、この時期の自らの関心を、「〔軍隊のような〕一つメカニズムに動かされている中の人間」が、それに「酔っついたり、「みみっちい抵抗」⁷をしたりすることに定めていた。つまり、小島の関心は、国家や社会が敷設した非人称的なメカニズムと、それに過剰に同一化しようとしたり、あ

るいはそれが適わずに軋み音を立てたりする諸個人との接点にこそあったのである。このような事実に鑑み、本稿では、『墓碑銘』が描写する軍事化のメカニズムと、それに多様なかたちで応答する諸個人の生とを、切り離すことなく論じていきたい。

まず、浜仲という主人公について考察しよう。浜仲富夫は、天津の租界で、アメリカ水兵である父と日本人の母とのあいだに生まれた。父は早くに二人を捨て、天津を去ったらしい。母は日本人の床屋と再婚し、良子という年の近い妹を産んだ。浜仲は、アンダーソンという人物を保護者とし、トーマス・アンダーソンと名乗り、日本人であることを隠して、アメリカ人たちのミッションスクールに通っていた。

小島が所属していた北京の情報部隊には二世の兵士が複数在籍しており⁸、浜仲の設定をただちに「寓話的」とは言えない。しかし、その出自から、日本という共同体からのズレを含む浜仲は、国家の軍事的メカニズムがどのような手段で諸個人を自発的に従属させていくかを描く上で、きわめて有効な主人公であることも確かである。

冒頭に近い、以下の場面を見よう。寮から帰った浜仲は、母親に命じられて、床屋の義父が日本人客と談笑している店内に入っていくことを強いられる。

私は身体をおこして、つかつかと店へ入っていった。そしてこう叫んだ。

「みなさん、いらっしゃい。僕は、寮から帰ってきました。今日はいい天気ですね」

客はいっせいにこちらを見た。沈黙が流れた。父のカミソリの下にいる日本人が、鏡の中に私の顔を見ることができるのに、カミソリを顔でおしのけるようにして、ふりむいた。(一〇六) (傍点引用者)

日本語の教科書を読み上げるような浜仲の挨拶は、かえって異様な印象を与える。日本人客は一斉に振り向き、青い目の青年が日本語で喋っていることを確認する。そして、浜仲を拒むような沈黙が流れる。このように、浜仲は、日本人らしく振舞おうとしても、「日本人であること」と一致できない。それでも、母親や妹は、家族である以上、同じ日本人でなければならないという態度で浜仲に接する。それに応えねばという気持ちが、浜仲に「日本人になること」の努力を強いるのである。客の一人は、「精神修養」のために撃剣を習うことを勧める。これは、「日本人になること」の最終地点が、日本という国家のために命を捧げるという軍事化の完遂と同義であることを暗示している⁹。

しかし、浜仲には、アンダーソンや友人のディックと共にアメリカ人として生きていく道も、あるいは友人の楊と共に中国人のあいだで生きていく道も開けていた。浜仲は、なぜそれらの道を選択しなかったのだろうか。『墓碑銘』は、家族による同調の圧力以外に、別の要因を用意している。

真珠湾攻撃の翌日、浜仲は、天津に進軍してきた日本兵に、「おい、ここは毛唐のくるところじゃないよ。今に追っ払ってやる」(一〇八)という言葉を投稿つけられる。浜仲

は、この言葉に「この世の中に生まれてくるな」という最大級の暴力を聞き取る。しかし、同室のディックから驚くべきことを聞かされる。浜仲は、夜中に寝言で、「日本軍の兵隊にいわれたこととそっくりの調子でしゃべっていた」（一〇九）というのだ。

ここには、被抑圧者の浜仲が、抑圧者の価値観を否定するのではなく、むしろ内面化してしまうという問題が描かれている。つまり、「毛唐」として、追い払われ、殺害されても仕方ないものとされた浜仲は、そのような自分への差別を不当と感じるだけでなく、差別を受けるべき人間は自分の他に存在するという方向に考えを進めてしまうのだ。実際、浜仲は、「この民族〔日本人〕の中には、普通の人種と、もう一つ卑俗な人種がまじりあい、私に呼びかけてきた男はその卑俗な傾向の強いものにあたるのではあるまいか」（一〇九）と考え、図書館で人類学の本を調べ、あの男は「朝鮮人やアイヌ人」だったのではないかと想像する。つまり、アメリカ人との「混血」である自分のほうが、「朝鮮人やアイヌ人」の疑いがある暴力的な兵士よりも、日本人に近い優秀な人間だと考えるのである。

ここから、浜仲を「日本人になること」へと駆り立てるのは、家族からの同調の圧力と共に、暴力的な差別を正当化された特権的な主体への同一化の欲望であることが分かる。このとき、租界へと追いやられるアンダーソンやディック、あるいは楊のような人物は相対的に魅力を失うのである。

浜仲が自宅に掲げられた「日本の人種の代表であるばかりか、神様である、天皇と皇后の写真」（一三〇）を見上げ、「その写真の顔を自分の顔であると、思いこもうと、はげしくもが」（一三一）くのは、象徴的である。なぜならば、天皇と皇后の「御真影」は、家族のあるべき規範を国民に示すと同時に、男性、女性の「国民化」を促すものでもあるからだ¹⁰。

第一に、御真影は、国民が遵守すべき近代家族の規範を示す。天皇と皇后が左右に並んだ構図は、一夫一妻、異性愛カップル、「純血」の日本人同士、同等の身分・階級同士の結婚こそが、近代国家にふさわしい家族形態だということを知らしめる役割を持つ。第二に、天皇と皇后の御真影はそれぞれ、男性、女性が国民として遵守すべきジェンダー規範を示す。この内、天皇が軍服姿で写っていることは、全ての男性国民は軍人として国家に貢献すべきだということ、言い換えれば国家の「敵」に対しては排除や殺害も正当化されるのだということを知っている。このように、浜仲が、「純血」でないことで、父、母、妹に疎外感を持つことと、自分が受けた暴力を別の他者に転嫁してしまうこと¹¹の背景には、御真影を利用した、家庭の規範ならびに同胞／敵という暴力的な区分の刷り込みが存在する。

浜仲は、日本人になるために剣道を習い始める。さらに、御真影を自分の顔と思い込もうとする努力に加えて、「神田の生れよ」、「スシを食いねえ、さあ食いねえ」、「東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹とたわむる」といった、「耳から入っていつしか私の口

から自然にほとぼしりである日本語（一三一）を呟いてみたりすることで、必死に「日本人」に同一化しようと試みる。

このような浜仲の努力は、言うまでもなく滑稽なものだ。しかし、この滑稽さは、浜仲一人のものではなく、日本という国家に所属する成員全てに当てはまるものだということを忘れてはならないだろう。日本人であっても、「非国民」とみなされる危険は常に存在している。それを避けるために、市井の言葉や、ラジオや新聞の言葉を、自分の言葉として取り込み、周囲との同一化を図ることは決して特殊な行為ではない。日本人は初めから「日本人である」のではなく、様々な努力を重ね、日々「日本人になる」のである。

浜仲は、国策映画の撮影のために、租界のディックと再会する。その際、浜仲は、「僕は最初から道化役だからね。僕と君はよく学校でいっしょに芝居をしたがね」と自嘲気味に語る。つまり浜仲は、「混血」の自分がどのようなアイデンティティを選び取っても、「芝居」の性格を免れ得ず、傍からは「道化役」のように見えてしまうことを知っているのだ。しかし、繰り返せば、何らかのアイデンティティを演じる「道化」であるのは、浜仲一人ではない。国家に属する成員はみな、多かれ少なかれそのような演技に与っているのである。

3. 軍隊と動物

浜仲は、自分を日本人だと考えることで、自分への差別を否認しようとする。しかし、決定的な局面になると、「太郎」という名の軍用犬を連れた軍曹が現われて、浜仲の立場を思い知らせる。浜仲を見てけたたましく吠える軍用犬について、軍曹は「例の租界の中を警戒するのでね。あの中の中臭いには敏感なんでね」（一二五）と得意げに語る。浜仲が中国人の友人楊から共に暮らすのを提案された直後、そして、軍に入隊した浜仲が脱走を試みた際にも、この軍用犬が浜仲に襲いかかる。この設定は、国家の管理の外にはみ出したものは、もはや「人間」ではなく、犬に吠えられ、狩りたてられるのが当然の「動物」とみなされることを示唆する。このような動物に擬せられることへの屈辱と恐怖が、浜仲にますます軍隊との同一化を欲望させることになる。

しかし、このような人間／動物の分割は、「混血」としての浜仲一人の問題ではなく、軍隊という組織そのものを成立させる根本原理に他ならない¹²。例えば、天津に進軍してきた日本兵を目撃して、浜仲は次のような印象を漏らしている。

そうして舗道の上には、汗がいくつも小さなしみを作っており、何か屠殺のあとのような息苦しい気分をただよわせていた。それが私とつながる人間の身体の中からあふれ出し、かたい衣服をとおして、しかもしたりおちた、ということが、私を動揺させた。（一〇八）（傍点引用者）

ここで浜仲が「屠殺」を連想することには、二つの方向から解釈が可能だろう。一つは、兵士たちが、戦闘に携わることに起因する。すなわち、彼らは、同じ国家に所属しない者を、法の保護の外部にあって、殺害すら正当化される「動物」とみなし、殺人に手を染めているのである。そして、もう一つは、兵士たち自身の境遇に起因する。兵士たちもまた、兵営の内部では、人間としての尊厳を奪われ、「動物」のように扱われている。そして、もし軍紀違反を犯せば、いつでも刑場に引き出され、殺害されるという恐怖にさらされているのである。

さらに、浜仲が軍に入隊した後、伊藤上等兵は、「朝丸」と名づけられた軍馬を脇に、浜仲たちに向かって次のように訓示する。

「いいか、馬がお前たちより利口なことは昨日いった通りだ。馬に見習うようにせい。馬は五十貫の器材をかついで歩けるが、お前たちにそれができるか。馬より早く走れるものは手をあげてみい。馬よりよけいに飯を食べるものは手をあげてみい。誰もいないだろう。馬よりすぐれたものは、お前たちの中にはいない」（一六四）

この訓示は、浜仲たちを、動物というよりも、「動物以下」の存在として位置づけるものだ。浜仲はこれに、「日本人というものは何というふしぎな顛倒をおこない、それでいてはつきり信じているものか」と衝撃を受ける。しかし、馬の来歴を詳しく知れば、これが「ふしぎな顛倒」などではないことがはっきりする。一般に知られるように、もともと日本の馬は体が小さく、諸外国と比較して見たとき、軍馬としては決定的に不適格だった。日露戦争が開戦すると、一九〇四年四月七日の明治天皇の勅命によって、臨時馬制調査委員会が立ち上げられ、三〇年間に及ぶ馬政第一次計画が定められた。こうして軍事目的の人工的な淘汰が繰り返された結果、「往年の矮小劣格な在来馬はほとんど姿を消し、わが国の馬匹は薄い皮膚の気品に富む軽快な乗馬や頑健で強力な輓馬や雄大な重輓馬にさえ変化した」¹³のである。つまり、浜仲の目の前に存在するのは、国家事業によって根底的に軍事化された生命であり、ある意味で兵士の模範とも言うべき存在なのである。

軍隊という組織の価値基準に従えば、このような馬に比べ、浜仲たち初年兵が「動物以下」であるのは当然のことと言える。要領が悪く、殴られてばかりいる沢村が思わず「ああ、死にたい、死にたい」と泣き出すと、上等兵は、「いいか、まだなかなか死なせてもらえない。死ぬまでにはウンと苦労するのだ」（一七三）と言い放つ。兵営内には理不尽な暴力が充満し、初年兵は「動物以下」としての身分を強制的に自覚させられる。それは、「地方」（兵営外の一般社会）で他者たちとのあいだに結び合った人間的な関係から、新兵を根こぎにし、法外の恐怖にさらされた孤独な動物に変える行為なのである。

このような暴力的な抑圧は、「動物以下」とされた初年兵のあいだでも、さらに下位のカテゴリーを作り出すように促す。沢村は、上等兵から「いいか、お前は浜仲を目標にするんだ。浜仲に負けんようにするんだ。浜仲に負けるようなら死ぬ」と言われ、「分っております」（一六〇）と答える。皆から馬鹿にされている沢村でさえこのような物言いをすることが、浜仲に軍隊での自らの劣位を改めて思い知らせる。浜仲は、自分を侮辱した沢村を、朝丸の目の前でリンチする計画を立てる。浜仲は、「こいつ〔沢村〕のハートはどのくらいふみにじってもいいのだ。いってみれば、虫けらみたいなものだ。虫けらの心のことなぞ誰が考えてやるものか」（一九八）（傍点引用者）と考え、馬の水桶に何度も沢村の顔を押し込む。つまり、浜仲は、沢村を「虫けら」として馬のずっと下位に位置づけることで、自分を相対的に「人間」のカテゴリーに近づけようとするのである¹⁴。

しかし、浜仲は、自分の上官もまた、一匹の動物でしかないことに気づいている。浜仲は、自分たちに訓示した伊藤上等兵の瘦せた脚を見て、それを「鶏の脚」（一八四）だと悪態をつく。つまり、ひとたび軍服を取り去ったとき、そこには等しく法外の恐怖にさらされた、傷つきやすい身体が覗くのである。そうだとすれば、浜仲がすべきだったのは、馬や沢村を競争相手としつつ、中心への同一化を欲望することだったのだろうか。むしろ、彼らの存在様態と正面から向き合うことこそが重要だったのではないか。浜仲は、朝丸について次のように語っていた。

私は馬はやはり自分たちより下のもので、そして私より下のものであって、馬だけには仲間になれるとひそかに期待していたのだ。私は馬の善良さを信じていたから。「馬に生まれかわってこい」という言葉は特に私の心をさした。そのとき私は馬になりたいという気持があったからだ。（一六四）

ここでは、馬と自分のどちらが上かという優劣を気にしながらも、「馬だけには仲間になれる」、「馬の善良さ」、「馬になりたい」という言葉に明らかなように、浜仲の馬への連帯意識を確かに読み取ることができる。これはどういうことだろうか。

浜仲たちは朝丸に翻弄される。というのも、両者のあいだには共通の言語が存在しないからだ。浜仲たちは、「馬が襟の星を人間のようによく知っていて、初年兵の一つ星のものに対しては、軽蔑の態度を見せる」（一六三）という噂を信じて、朝丸に襟の星を隠したり、「何が星の数を知ってるものか。馬だって食い気だけだわい」（一七一）と思い直して、人参を使って朝丸を従わせようとしたりする。また、馬を愛する神岡上等兵は、「朝丸はそのときのこと〔以前の作戦で功績をあげたこと〕を口でこそいわないがよくおぼえているよ」（一七四）と訳知り顔で語る。しかし、これらの推測が正当である保証はどこにもない。朝丸の本当の内面は浜仲たちにとって不可知のままである。言い換えれ

ば、馬は人間たちに対して異邦性を保持する。このため、従軍させられる馬は、独特の痛ましさを喚起する。つまり、馬にはもっとふさわしい生の場所があるのではないかという思い、このように馬が人間の戦争に従軍させられているのは不自然なのではないかという思いを喚起してしまうのである。

このような性質は、実は浜仲も共有するものである。隊長は全員の前で、「たとえば、ここに城壁がなく、きびしい掟がないとしたら、浜仲、お前は引き上げていくのではないか」（二〇八）という不安を口にする。また、ある上等兵は、「ええか。みんなお前のせいなんだ。お前がここにいるから、調子が狂ってくるんだ」（二〇三）と浜仲にからむ。つまり、浜仲もまた異邦性を身に帯びているがゆえに、周囲のものはその内面まで見通すことができずに不安を覚える。そして、日本の軍隊に浜仲が従順に従っていることの不自然さ、痛ましさは、周囲のものたちにも反照する。いわば浜仲は、日本兵一人一人が感じている、日本人化＝軍事化の重圧を可視化してしまうのだ。したがって、浜仲は、「浜仲に負けるようなら死ね」と引き合いに出される軍事化の材料であると同時に、軍隊にとっての一つの攪乱要素にもなり得るのである。

もし、浜仲が、軍馬の歪められた生命のあり方に向き合えていたら、そしてそこに自分自身の姿を重ねることができていたら、果たして日本人への、人間への、同一化の欲望を持ち続けたらどうか。そのとき、「馬だけには仲間になれる」、「馬の善良さ」、「馬になりたい」という思いはどのような方向に育っていったらどうか。『墓碑銘』はこのような問いを開いたままにしている。

4. 軍隊と家庭

軍隊は、「地方」の人間関係から新兵を根こぎにし、法外の恐怖にさらされた孤独な動物にする。しかし同時に、軍隊は、これら根こぎにされたものたちを、擬似的な家庭として内包する性格を持ってもいる。

隊長は訓話で、「部隊は一つの家族だ」（二〇七）とした上で、「親はいつでも子供のことを心配している。隊長は二十三歳で子供をもったことはないが、隊長は部隊の父だ。父は子供のことが気がかりだ」（二〇八）と語りかける。そして、「浜仲がこの部隊の中でりっぱな一人前の兵隊になれたときには、ほかの者はいうまでもなく、陛下の〔中略〕赤子になれるはずだ」とも付け加える。ここには、明治民法に根拠を持ち、一九三七年の『国体の本義』、四一年の『臣民の道』（共に文部省刊行）で強化された、いわゆる家族国家イデオロギーの一例を見て取ることができる¹⁵。

しかし、そもそも年齢も学歴も職業も異なる兵士たちは、どのようにして、軍隊に「家族」のような親密さを感じるように促されるのか。ここではそれを、女性たちに注目して考察してみたい。

軍隊は女性を構造的に必要としている。これは、二つのレベルで確認できる。第一

は、表象のレベルである。「陛下の赤子」という表現からも明らかなように、天皇には、勇敢に戦うことを命じる父の表象に加えて、兵士たちがそこから生まれそこへと還っていく母の表象が重ねられている。このように、父母両面の表象が揃って、兵士たちを戦いに向かわせることが可能になる。第二に、現実のレベルでも、総力戦を戦うにあたって、女性の動員は不可欠だった。シンシア・エンローが指摘するように、「軍隊の政策決定者は、女性たちが多くの軍事化された役割——士気の向上、戦中戦後の癒しの提供、次世代の兵士の出産、生命を賭すに値する母国のシンボル、適切な男性新兵不足の補填——を果たすことを必要としてきた」¹⁶。『墓碑銘』では、看護婦を志願した浜仲の妹の良子、従軍慰安婦として登場するアキ子とトミ子を通じて、女性の軍事化が描き出されている。

まずは、アキ子とトミ子について考察しよう。彼女たちは、「父」である隊長の承認のもと、経理伍長の監督下に入り、危険な奥地に向かう部隊に従軍させられる。

軍隊による慰安所設置について、吉見義明は、強姦防止、性病予防、「慰安」の提供、スパイ防止の四つの理由を挙げている¹⁷。この内、強姦防止の目的については、「慰安婦制度とは、特定の女性を犠牲にするという性暴力公認のシステム」である以上、「一方では性暴力を公認しておきながら、他方で強姦を防止するということは不可能であり、当然ながら、強姦事件を防止する本質的解決に結びつくはずもなかった」¹⁸と結論している。別の見方をすれば、慰安婦制度の公認こそが、戦場の強姦事件を使喚する機能を果たしたとも考えられる。

これを重視すれば、慰安所には、男性たちが女性を共有して絆を強めるという機能、卑俗に言えば「兄弟」になるという機能もあったと推測できる。浜仲は、アキ子の部屋から出て行く際に、「おさきに失礼しました」という挨拶を忘れ、上等兵から叱りつけられる（二〇三）。慰安所から出る男性同士の間に関わられる挨拶の習慣は、女性への欲望というよりも、女性を従属させ、支配する力を男性同士で確認するという、ホモソーシャルな欲望を表わしているのではないか。イヴ・K・セジウィックは、女性を共有することで、「男たちが全体としてもっている女性に対する支配権に自分も与ることができ、自分よりも権力のある男たちに近づくことができる」¹⁹ことを指摘している。

ここでの構図は、父＝隊長、ひいては天皇が、管理する女性を息子たちに投げ与え、そうすることで兄弟間の結束を強めるというものだ。そして、このホモソーシャルリティは、男性が、敵に、あるいは敵の大地に、女性の表象を投影することで、侵略を正当化するイデオロギーとなって機能するのである。

『墓碑銘』には、慰安婦たちの生々しい声書き込まれている。朝鮮人慰安婦のアキ子は、「それともあんた私が朝鮮人だからイヤというの」、「さあ恥をかかせないで」（二〇二）、「そら、ここにさわって。日本人とおんなじよ」（二〇三）と浜仲を説得する。他方、日本人慰安婦のトミ子は、普段はアキ子に対する優越感を持っているが、「あいのこ」の

浜仲に日本人と朝鮮人の区別は無意味かもしれないと気づくと、「じゃ、日本人とはイヤなのね」、「人間にかわりないわ」(二四二)、「あたしたちはね、ここまで落ちてくるんだから、誰もこわくないんだよ」(二四三)と途端に声を荒げる。彼女たちの言葉は、日ごろ兵士たちに「朝鮮人」として、あるいは「売春婦」として内心で嘲られ、同じ「人間」とさえみなされないまま、性的に搾取されている事実を証言している。浜仲からの拒絶を彼女たちが「恥」とみなすのは、彼女たちがそのような環境の中で、せめて「必要とされている」、「欲望されている」という幻想を支えに生きていたからではないだろうか。

だが、浜仲の拒絶は、彼女たちへの軽蔑というよりは、「日本人の女がおそろしかった」、「母親以外の女におこられるのがたまらなかった」(二四三)という理由からである。つまり、浜仲は、日本人女性から何らかのきっかけで拒絶され、日本人男性としてのアイデンティティを否定されることを恐れているのである。それに加えて、浜仲は、軍隊への入隊以前から、妹の良子に憧憬を抱いてもいた。物語冒頭で、「私はこの妹が、自分の妹のように思えるばかりではない。こんなことをいっても、誰も信じてくれないが、私はあこがれている。それはなぜか。この感情は、私には、ほかの女にも、いわんや母親に対してもない」(一〇五)と語っていたように、浜仲にとって良子は、「純血」の日本人であるという点で、このように産まれるべきだったもう一人の自分でもあった。浜仲は、脱走を試みた際にも、「僕はここを出る。どこへ行くか分からない。僕はお前がただの妹には思え得ない。お前を自分のものにすれば、僕には自信がつくが、それができない」(二一〇)と書き送っている。

良子もこの事情を正確に理解しており、看護婦として戦地の兄を追う。そして、「兄さんは私が好きなのです。それは、誰にも分らないことだけど、兄さんが私を好きなのは、ただ私を好きなのではないのです。私には分っています。私が日本人であり、私が血をわけた妹だからです」(二二六) (傍点引用者)と書き送る。その上で、良子は、「私たちが戦争をしているのは世界を一つにするためですもの。それが大東亜戦争の意味ですもの」と告げ、浜仲と「一つに」なることを自ら提案する。これは、浜仲を戦場に立たせるための、看護婦としての最適な治療でもあっただろう。

浜仲は、良子と関係を持った後、「自分が混血であるひけめを少しもかんじなくなった」(二五二)と語る。つまり、浜仲にとって、良子との性交は、自分の「純血」の日本人像と同一化したことと共に、一人の日本人女性を所有したことで、日本人男性たちとのホモソーシャルな環に加わられたことを意味するのである。

このように、『墓碑銘』は、看護婦の良子と、慰安婦のアキ子・トミ子が、それぞれ別の場所から、軍隊に貢献しているさまを描いている。重要なのは、両者の領域が没交渉的にもかかわらず、果たしているのは、男性に、癒し、自信、男性同士の連帯感を与えるという同一の役割だということだ。もちろん、男性が慰安婦に向ける態度と看護婦に向ける態度は大きく異なる。前者が差別的・暴力的であるのに対し、後者は憧憬を含ん

だものであり得る。しかし、両者の扱いの差異は、結局のところ、産む女性＝母になる道が開けているかどうかという点にしかない。つまり、看護婦には、将来産む女性＝母としての役割が期待されるがゆえに、男性たちからは手厚く扱われ、他方慰安婦には、その役割が期待されず、生殖から切り離された性を延々と強要される。逆に言えば、軍事化された社会では、次世代の優良な兵士を再生産するという役割を失ったとき、いかなる女性も、国家のために戦う男性に、癒し、自信、男性同士の連帯感を与えるための人的資源として扱われ得るのである。

この点に軍隊と家庭との通路が存在する。軍隊は家庭を僭称するが、もちろん両者の組成は異なっている。最大の差異は、軍隊はその内部では、次世代再生産を行なう必要がないということだ。このため、軍隊における女性の扱いは、一般社会で、あるいは一般家庭で、子どもを産む役割を抜きにしたとき、女性がどのように扱われ得るかの、グロテスクなシミュレーションになり得る。すなわち、女性は、公的領域に奉仕する男性に対して、自己の身体を犠牲として余すことなく捧げることを期待されるのである。このように、軍隊と家庭とのあいだには、相似的ではないが、連続的な関係が存在する。家庭における男女の配置は、軍隊を事前に準備し、支えるものでもあるのだ。

一度は脱走まで試みた浜仲は、妹の良子の身体を媒介として、日本軍隊との同一化を果たす。軍隊の家庭のような親密さは、このように女性に一方的な犠牲を強いるホモソーシャルリティによって保証されている。しかし、同時に浜仲は、金髪を珍しがられ、上官や同年兵に引き抜かれたり、あるいは隊長や中村兵長という一部の者たちから特別扱いをされ、可愛がられたりするなど、男性性の枠から越境し、周囲を常に攪乱する存在でもある。浜仲のこのような性格は、ミッションスクールにおけるディックや楊とのセクシュアルな空気を通じて、初めから強調されてもいた。もし浜仲が、このような自らの立場を捉え直し、アキ子、トミ子、良子を、ホモソーシャルな環に加わるための道具とみなさず、その境遇への理解を深めていたら、どうなっていたらうか。しかし、実際に浜仲がしたのは、男性たちに欲望される身体であることを否定し、女性を欲望する主体として自らを完成させていくことで、軍事化のメカニズムに適応していくという道に他ならなかった。

5. 軍事化を攪乱する

ここまで、『墓碑銘』の内容面に注目しながら、国民を軍隊へと動員し、兵士として教育していく軍事化のメカニズムについて考察を進めてきた。しかし、『墓碑銘』には、語りの面にも、注目すべき特徴がある。それは、この物語が、後から語られているのを幾度も強調しているということだ。任意に拾うだけでも、「そのあとのことは、もう私にはどういったいいのか分からない」（一〇七）、「私のしていることが、どんなに恥ずべきことか[中略]ということを知ったのは、もっとあとになってからのことである」（一三一）、

「^(ママ)先きを急いでではない。私には語るべき多くのことがある。その語り方の難しさに、筆がしぶるのだ」(一五三)というような挿入がある。そのたびに、読者は物語内容と物語言説とのあいだの距離を意識させられるのである。

浜仲の部隊は、中国大陸からフィリピンのレイテ島に派遣され、そこで壊滅することになる。興味深いことに、この経緯に従って、浜仲の語りもまた動揺を始め、それが事後的に編纂されたものであることをより明確にし始める。例えば、「ひそかに良子にあてた、私の手記の一部。(原文カナ書き)」(二六一)という断り書きの後、「僕」から「お前」に宛てた文章が挿入されたり、軍隊手帖からの引用で、原文は英文であることが明記された上で、「十二月十二日 森いう。お前と同じ顔を見た、お前に会ったような気がした、と」(二八三)といった断片的な日記が挿入されたりする。これはレイテ島の過酷な惨状を前に、語り手が、継ぎ目のない、一貫した語りを行なうことができず、当時の資料を生のまま持ち出さざるを得なかったという事態を表現していると考えられる。

この間の内容を簡単に追っておこう。まず、中国大陸で夜襲を受けた際に、朝鮮人慰安婦のアキ子が死ぬ。遺されたトミ子は、「もうかくごしたわ。あなたなんか、かくごできる？」(二四八)と浜仲に尋ね、大同の病院へと消えていく。レイテ島に到着すると、軍馬を全て殺すように命令が下る。浜仲は、「なぜ、マニラにつれて帰らないのか、なぜマニラでもし乗馬にしないとでも、肉にして食べないのか」(二六七)と考え、「瞬間実に不快にな」(二六八)る。この「不快」の理由は、都合良く軍馬を「人間以上」と持ち上げておいて、一旦不要になれば食肉にしてでも最大限に活用し、戦闘の継続を図ろうとする軍隊の論理に自らが深く染まってしまったことを悟ったからだろう。そして、この論理は、浜仲に対しても、例外なく適用される。

フィリピンに向かう船は、敵軍の絶え間ない攻撃を受け、兵士たちは憔悴する。その中で、上等兵たちは、「あの人はやられません。あの人は海にうかんでいると助けにきてもらえますわ。トミイさんといってね」、「おいトミイ、潜水艦がいるかどうかよくしらべてこい。窓からのぞいてみい。お前の青い目には見えるだろうが」(二五七)とからむ。そして、船倉に戻った浜仲に、一人の伍長が暴力を予感させながら近づいて来る。班長は慌てて「そこの伍長、お前がするなら、おれがする。おれの兵隊のことは、おれがする！」(二六〇)と怒鳴る。これらの出来事は、浜仲がどれほど日本人に接近しようとしても、異質なものとしての差別は消えることがなく、非常事態になれば、真っ先に内通の嫌疑をかけられたり、殺害が容認されたりするという事実を明らかにしている。

このように、軍隊は、決して浜仲が期待するようなものではなく、弱いもの、異質なものを真っ先に切り捨てることで延命を図るという事実が明らかになっていく。当然、浜仲のアイデンティティも再び揺らがざるを得ない。戦闘の合間に、浜仲は一人になって、手帳に「ヨシコ」と妹の名前を書きつけてみる。

そうすると、私は文字というものが、こんなに強い力をもっていることに今さらのようにおどろいた。ルソン島にいる時にも、そんなかんじはあまりなかった。ところが今はそれが力強く、私がジャングルの中に行く日もいたとは思えぬような気持になるのであった。次に私は女、人間、と書いた。それから私、浜仲富夫、と書いた。新鮮でみずみずしく、書いている自分がただの棒切れに見えてきた。いよいよ、と書いた。チュークン、アイコクと書いた。すると棒切れが強かたくなった。まだ書いている、と書いた。それから誰かに責任があれば、それは神ですよ、と書いた。私はそれらを英語またはローマ字で書いた。(二八三)

兵士にとって、書くことと読むことが大きな魅力を持っていたことは良く知られている²⁰。それらの行為は、いま自分がいる戦場を仮想的に離れ、ここではないどこか、いまではないいつか、未知の他者たちと繋がることを意味した。地獄のような戦場から脱出することは叶わないかもしれない。しかし、その地獄を書きとめることで、書かれたものは未来へと繋がる。浜仲が文字に「強い力」を感じるのは、かつてないほど死に接近することで、文字のそのような機能に目を開かれたからである。

浜仲は、「女」、「人間」、「私」、「浜仲富男」という文字を書きつける。それらは単なる記号ではない。ここまで確認してきたように、「浜仲富夫」／「トーマス・アンダーソン」の対立が「日本人になること」の欲望を掻き立て、「人間」／「動物」の対立が軍隊への強迫的な同一化を促し、「男」／「女」の対立が軍隊内の男性同士の結束を強化する。つまり、それらの文字の対立こそが、浜仲の軍事化された「私」を形成し、レイテ島の戦場へと導いたのである。文字のほうが「新鮮でみずみずしく、書いている自分がただの棒切れに見えてきた」というのは、まずはこのような、言葉が主体を操るものだという事情を意味している。実際、「チュークン、アイコク」という文字は、このような状況でもなお、棒きれのような浜仲を再び「強かたく」するのである。

しかし、文字は、浜仲を束縛すると同時に、解放へ導くものでもある。すなわち、「[文字のほうが] 新鮮でみずみずしく、書いている自分がただの棒切れに見えてきた」という感覚は、たとえ自分が死んでも、言葉は必ず生き延び、誰かのもとに届くはずだという思いを代弁してもいる。だからこそ、浜仲は「チュークン、アイコク」に続けて、「まだ書」く。「誰かに責任があれば、それは神ですよ」という一見無責任な言葉も、書かれてしまえば批判の対象になり得る。あるいは、読者が神＝天皇という連合を作ってしまうと、たちまち政治的な告発にさえ変わる。何より、これらの言葉が「英語またはローマ字で」書かれているのは示唆的だ。というのは、現在は敵と味方に分かれて殺し合っている者たちのあいだを越境して、書かれた文字は向こう側に届く可能性があるからだ。ここで浜仲が書くという行為に魅惑されるのは、このような未来の可能性をひそかに感じ取っているからだろう。

この挿話は同時に、浜仲という語り手がなぜ『墓碑銘』を書いているのか、という大きな問題とも接続する。前述のような終盤の語りの混乱を見れば、浜仲にとって、レイテ島での戦闘について想起し、文字に記すのは困難を極める行為だったことが分かる。にもかかわらず、なぜ浜仲はこの時期に、過去の戦争について書き、読者に差し出さねばならなかったのだろうか。

その答えは、恐らく次のような挿話から読み取れるだろう。レイテ島の戦局は悪化の一途を辿る。沢村は遺棄され、中村兵長は脱走を試み、神岡が死に、戦友の森、隊長までもが行方不明になる。浜仲は、米兵の死体から奪った軍服を重ね着して変装し、斬り込み部隊に加わっていたが、ついに副官から「カイサン」を言い渡される。

島の奥へと向かった浜仲は、「服をぬいでしまいたいという衝動」（二八七）に駆られる。国民服や軍服に始まり、様々な仮装を通じて「道化役」を演じてきた浜仲は、ここで新しい局面に入る。最初にアメリカの軍服を、次いで日本の軍服を脱ぎ、裸のまま野原に横たわる。これは、軍事力を手放し、あらゆる国籍から離れ、自ら進んで、国家の法の保護の外部に出たことを意味する。次の瞬間、浜仲は、自分を狙っている小銃の気配に気づき、「おれは日本人ではない。おれはアメリカ人でもない」（二八八）と叫ぶ。

前述のように、『墓碑銘』は、五九年五月から六〇年二月まで『世界』に連載された。この間の主要な政治問題は、日米安全保障条約の改定だった。『世界』誌上でも、『墓碑銘』連載開始直前の五九年四月号で「特集・日米安保条約改定問題」を組んだ後、一〇月号「共同討議・政府の安保改定構想を批判する」から、六一年一月号の「特集・総選挙——安保闘争の後に」まで途切れることなく、この問題を取り上げている。

安保問題の根底には、五一年のサンフランシスコ講和会議の際に日本国内を二分した、単独講和論と全面講和論の対立が存在する。そこで争われていたのは、アメリカと軍事同盟を結んで、沖縄をはじめとする各地へのアメリカ軍の駐留を引き続き認め、冷戦構造の一方に加担するか、それとも新憲法に基づき、非武装中立を貫いた上で、全ての国との平和的共存を模索するかという選択肢だった。日本政府が選択したのは前者の軍事同盟路線であり、この選択をさらに強化しようとしたのが、六〇年の安保改定だった。つまり、『墓碑銘』連載時の日本は、日米の軍事同盟を支えにした幻想的な家庭＝家郷を作り出すと共に、戦争責任ごとアジア諸国から、そして軍事化されて苦しむ沖縄から、意識を閉ざそうとしていたのである。

もし浜仲の語りの現在を『墓碑銘』発表と近接した時期と捉えるならば、浜仲の叫びは、日本にせよ、アメリカにせよ、敵の脅威をあおり、諸個人を恐怖にさらされた孤独な動物にした上で、何らかの家庭＝家郷への同一化の欲望を掻きたて、軍事化していく、国家のメカニズムへの告発として解釈できる。そして、それは、自ら進んで、裸であること、難民＝異邦人であること、動物であることを選び取り、「国民」や「人間」という概念の持つ暴力性を相対化しようとする困難な道程の最初の一歩でもあるだろう。浜仲

の叫びは、浜仲の属する戦場のみならず、日米安保という軍事的な同盟を背景に、責任を負うべき他者たちの声に耳をふさぎ、自国の経済繁栄のみを志向していく同時代の日本を根底から撃つ力を持っている。

最後に『墓碑銘』という題名について考察しよう。『墓碑銘』は、「日本人になること」の空しい努力の果てに、レイテ島で生死不明となる浜仲の悲劇の物語として完結する。しかし、事後的に語る語り手の姿が強調されていることから、読者は、浜仲が戦後を生き延び、五〇年代末から六〇年代にかけてのこの時期に、自らの体験を語り直している様子を想像できる。それは、過去の自らの軍事化の道程を、同時代の状況と重ね合わせつつ、その転覆を図ろうとする行為に他ならない。この意味で、この小説は、兵士としての浜仲の「墓碑銘」であると共に、国家の軍事化を攪乱する新しい主体の再生の物語でもある。新たな軍事化が進行しつつある現在、『墓碑銘』はこのような観点から読み直されねばならない。

6. 結論

『墓碑銘』は、トーマス・アンダーソン＝浜仲富夫という二重のアイデンティティを持つ主人公が、日本という国家によって軍事化されていく過程を詳細に描き出している。本稿では、これを三つの段階において確認してきた。第一に、国家が、国民を軍隊に動員する段階である。これは、国家が、家庭規範を通じて、国民の同質化を促すと共に、異質なものに対する暴力的な差別を容認することでなされる。第二に、軍隊が、その成員に階級意識を内面化させる段階である。これは、軍隊が、人間／動物という分割を作り出し、初年兵を、恐怖に怯える孤独な動物へと変えることでなされる。第三に、軍隊が、その成員に連帯感を獲得させる段階である。これは、従来指摘されてきた、上官との擬似的な父子関係と共に、女性を性的搾取の対象として動員し、男性同士の絆を強化することでなされる。このような軍事化を乗り越えていくためには、国民／非国民、人間／動物、男性／女性、といった人工的な境界線を攪乱し、異質な他者を排除するのではなく、歓待²¹するための論理が不可欠となる。この点に、小島の軍隊小説と家庭小説とを繋ぐ結節点が存在すると考えられる。「馬」（五四・八）や『抱擁家族』（六四・七）など、小島の家庭小説には、しばしば男性の「主人」の座を脅かす、異質な侵入者が出現する。しかし、それを再主体化のための契機として捉えずに、むしろ家庭のあり方そのものを組み替えるための攪乱要素として捉え直すこと²²。このような読みの先に、軍事化のメカニズムへの抵抗という、小島の小説の一貫した主題を読み取ることができるはずだ。

註

¹ 「星」に関しては、五十嵐恵邦『敗戦の記憶——身体・文化・物語 1945～1970』（中央公論

- 新社、二〇〇七年) に詳細な分析がある。
- 2 本稿では、「軍事化」の概念を、シンシア・エンローに従い、「何か徐徐に、制度としての軍隊や軍事主義的基準に統制されたり、依拠したり、そこからの価値をひきだしたりするようになっていくプロセス」として捉える(『策略——女性を軍事化する国際政治』、上野千鶴子監訳、佐藤文香訳、岩波書店、二〇〇六年、二一八頁)。
 - 3 江藤淳「文芸時評(昭和三十四年十二月)」、『全文芸時評 上巻』新潮社、一九八九年、六〇頁。
 - 4 濱本武雄「解説——仮構性への志向」、小島信夫『墓碑銘』潮文庫、一九七二年、二九〇頁。
 - 5 千石英世「私であることのはじまり——『墓碑銘』」、中村邦生・千石英世『未完の小島信夫』水声文庫、二〇〇九年、五八頁。
 - 6 柿谷浩一「墓碑銘 小島信夫」、『コレクション戦争と文学 別巻』集英社、二〇一三年、二三六頁。
 - 7 奥野健男・村松剛・服部達・安岡章太郎・小島信夫・島尾敏雄・桂芳久・遠藤周作「近代文学の功罪——戦後文学と第三の新人」、『三田文学』、一九五四年三月、一一頁。
 - 8 小島信夫「混血児のレイテ戦記」、『小説家の日々』冬樹社、一九七一年。
 - 9 酒井直樹は、田辺元の「種の論理」を再考しつつ、国民は即自的に国民であることはできず、死を賭けた自覚的な決断を通じて、国民へと生成することを説得的に論じている(「日本人であること」——多民族国家における国民的主体の構築の問題と田辺元の「種の論理」、『思想』、一九九七年一二月)。
 - 10 若桑みどり『皇后の肖像——昭憲皇太后の表象と女性の国民化』筑摩書房、二〇〇一年。
 - 11 丸山眞男は、日本軍の現地住民への暴力の本質を、「国内では「卑しい」人民であり、営内では二等兵でも一たび外地に赴けば、皇軍として究極的価値〔=天皇〕と連なる事によって限りなき優越的地位に立つ」という「抑圧の移譲」の構造に見て取っている(「超国家主義の論理と心理」、『増補版 現代政治の思想と行動』未来社、一九六四年、二三頁)。
 - 12 金杭は、これを軍隊のみならず、主権国家そのものの原理とみなしている。「国家の民となっではじめて人間になりうる、というルソーの言葉は、それゆえ、動物である個人が国家によって人間となる、というより、国家によって動物と人間が分割されると、と解釈されるべきだろう。というのも、国家が生成するためには、まず何よりも、個人がただ生きる動物にならねばならないからだ。この無力な動物なしに、国家の民へと跳躍する人間は生まれ得ない」(『帝国日本の闕——生と死のはざまに見る』岩波書店、二〇一〇年、二七二頁)。
 - 13 武市銀治郎『富国強馬——ウマから見た近代日本』講談社選書メチエ、一九九九年、一二七頁。
 - 14 小島の「星」では、沢村にあたる人物が「匹田」、上官が「猪間大尉」と名づけられており、軍隊が、動物化された人間たちがさらなる下位区分の動物を作り出そうとするメカニズムによって駆動することを示唆している。

- 15 川島武宣は、家族国家イデオロギーについて、「一方では親を超絶的な尊貴の「身分」にひきあげつつ、他方では、天皇を父もしくは本家として「類推」もしくは「擬制」することによって、忠と孝との同一性ないし類似性を正当化し、家族関係による情緒的反応を天皇についても条件づける」「新たな権力支配の道具」と定義している（「イデオロギーとしての「家族制度」」、『日本社会の家族的構成』岩波現代文庫、二〇〇〇年）。
- 16 シンシア・エンロー『策略——女性を軍事化する国際政治』、五三頁。
- 17 吉見義明『従軍慰安婦』岩波新書、一九九五年、五二頁。
- 18 吉見、前掲、四四頁。
- 19 イヴ・K・セジウィック『男同士の絆——イギリス文学とホモソーシャルな欲望』、上原早苗・亀沢美由紀訳、名古屋大学出版会、二〇〇一年、五五頁。
- 20 野上元は、軍事郵便や陣中日記に着目しつつ、戦場において「書くこと」の重要性について説得的に論じている（『戦争体験の社会学——「兵士」という文体』弘文堂、二〇〇六年、第一章第三節）。
- 21 「歓待」の概念については、ジャック・デリダ『歓待について——パリのゼミナールの記録』（廣瀬浩司訳、産業図書、一九九九年）、『アデュール——エマニュエル・レヴィナスへ』（藤本一勇訳、岩波書店、二〇〇四年）を参照。
- 22 この点に関しては、拙稿「戦後家庭の失調——小島信夫「馬」の政治性について」（『國語と國文学』、二〇一四年六月）も参照されたい。
- ※ 『墓碑銘』の引用は、『小島信夫全集 第二巻』（講談社、一九七一年）に拠った。

